未来への飛躍を実現できる学校

西中学校だより

一本の樹

校訓　しなやかに　すこやかに

令和６年６月４日
第　３　号
上尾市立西中学校長
宮田　純生

学力の向上

校長　宮田　純生

今年度から西中学校では、学力の向上に向けて、「話合い活動を充実させ、自分の意見に根拠を持って発言できる生徒の育成」に取り組んでいます。

学力の３要素は、（１）基礎的・基本的な知識・技能、（２）知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、（３）主体的に学習に取り組む態度です。

これらの要素の１つが欠けても、学力の向上は難しいのではないでしょうか。

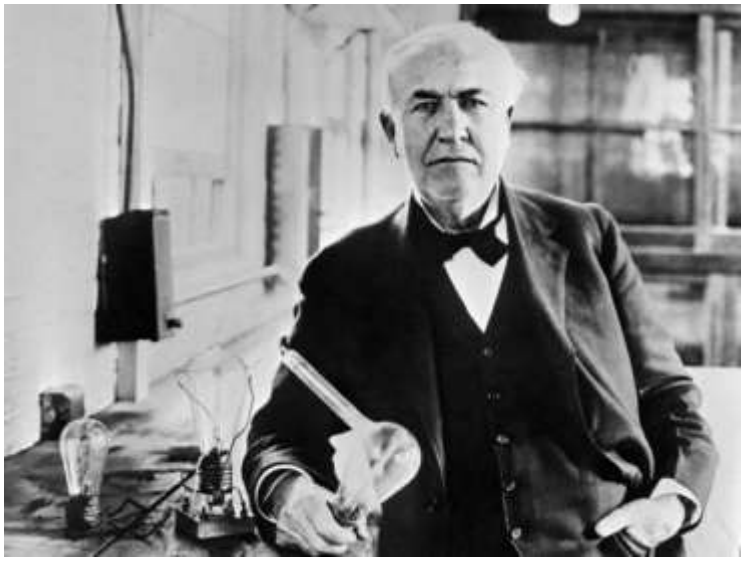
例えば、基礎的・基本的な知識や技能がなければ、知識を基に考えたり、正しく判断したりすることもできません。さらに、学習への意欲（向学心）がなければ授業態度がいいかげんになり学力の向上はできません。学力向上のためには、子どもたちにこれらのすべての要素をバランスよく育てることが重要となります。

この中で、思考力・判断力・表現力を向上させるため、「自ら学び、思考したことを表現することで学習への主体性も高まると考えています。

しかし、これらの学校の取組を効果のあるものにするためには、「学ぶ意欲」が大切です。発言したり、自分の意見を言ったりすることは生徒に自ら学ぶ意欲がないとなかなか難しいと考えています。

発明王トーマス･エジソンは小学校を退学させられたという話は有名です。「１＋１＝２」を先生が粘土を例にとって教えていたら、エジソンは、「１個の粘土と１個の粘土を混ぜ合わせても１個の粘土になるだけなのになぜ２個になるのか」と聞いたそうです。

また、エジソンの「なぜ」と知りたがる癖は、学校内だけでなく、家でも発揮されています。その疑問を解くために彼は、様々な実験を行い失敗します。これらの事が積み重なったことで、エジソンは学校からも父からも見放され、入学からわずか３ヶ月で放校処分を受けてしまったのです。



しかしながら、この「なぜ」という自分で疑問を持つという行動は、後のエジソンを支えていくことになります。

授業の中でも、先生から習ったことに「どうしてだろう」と思う生徒は主体的に授業に取り組んでいます。しかしながら、「ただ聞いているだけ」では決して疑問点は浮かんできません。子どもたちに「なぜ」「どうしてだろう」と思わせることや疑問を持って考えさせることが学力の向上に繋がるのではないかと考えています。

例えば、社会で「日本の輸出額が一番多いのは機械類である」と先生に教えてもらった時に、「機械類ってなんだろう」と疑問に思った生徒は先生に質問をしたり、自分で日本が輸出している機械類について調べたりするはずです。

このような繰り返しが、ただ学習の内容を教えてもらう（受け身）から自分で疑問を持って（主体的）授業に取り組んでいけると考えています。疑問を持つことはとても重要な事です。